

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Folklore and Ethnology Museums in Europe: Survey taken in the Summer of 1978

|       |                                                                                                    |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2010-02-16<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 杉本, 尚次<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.15021/00004549">https://doi.org/10.15021/00004549</a>                  |

ヨーロッパの民俗学・  
民族学博物館

——1978年夏の訪問記録から——

杉 本 尚 次\*

## 1. はじめに

1978年7月2日～8月31日、ヨーロッパの伝統的民家研究のため、野外博物館を巡検した。その間を利用して、民族学や民俗学関係の博物館を約30余、急ぎ足でまわった。したがってこの訪問記は、一般観客として博物館の展示場を通覧した形となっている場合が多い。なお巡検した野外博物館については別に報告するので、名称と所在地を示す程度にとどめる。ただ野外博物館でも、その中に独立した展示館などをもつものについては、その特色などにふれている。

交通機関としては鉄道を利用することが多く、車窓からの諸景観なども加えて紀行文風なものになっている。順序はほぼ巡検のコースにしたがっている。

## 2. パリ～ハンブルク

7月2日成田を発ち、モスクワ経由でパリに到着。パリでは1971年の訪問の時にトロカデロの人類博物館をみたので、今回はブローニュの森にある「国立民芸

民間伝承博物館」を訪ねる。肌寒い小雨の中、広々としたブローニュの森を歩く。1972年に開館した地上9階（地下2階）のモダンな建物。エントランスホールに案内所と売店があり、専門書も並べている。展示場は1階と地下1階。エントランスホールの左側は特展会場、右側は文化展示場になっている。展示テーマは「宇宙」と「社会」の二つで、各々小テーマ（例えば「環境と歴史」「技術」「慣習」「社会組織」……）に分かれる。文化人類学者レヴィ・ストロースがこの博物館の展示にかかわっているという。

地図による解説も多く、情報パネルはかなり詳しい。スライドによる解説もある。村の鍛冶屋を復元したものもあり、そこでは録音テープで音や職人の声を流したりしている。

地下1階は学術展示場。入口に展示の概要を示す大パネルがある。大型のガラスケースなどを用い、各種の鎌、斧、犁など農具類、牛馬の軛、木箱、ぶどう酒樽、民族衣装等々、農村の生活に関する「もの」がよく整理されている。この展示場の両側に約2m四方の小部屋（ブース）が40余あり、カラースライド、映画で各種の民族資料をみることができる。新しい展示方法だが、わが民博のビデオテークのように500余の番組の中から観客が自由に選べるのではなく、各ブースごとに項目が提示してある。しかも40%くらい閉鎖中だった。どうも故障らしい。民博ビデオテークの原初形態とみてよいだろう。一方、フランスを中心としたヨーロッパの民族資料収蔵数は40万点といわれ、そのうち1.5万点が展示されてお

\* 国立民族学博物館第4研究部



図1 民俗学・民族学博物館と訪問コース (1978)

り、実に豊富な資料の集積がある。

A・チッペリウス著の『ヨーロッパ野外博物館ハンドブック』によると、フランスには農家などを移築した農村文化の野外博物館はないが、この博物館が、その代役を果たしているようである。

パリ北駅からアムステルダム行急行でブリュッセルへ。列車は20分余で田園地帯に出る。なだらかな起伏のある地形。石を基礎にした煉瓦造りの農家、穀倉、家畜舎が多い。

国境通過はパスポートチェックのみ。

2時間半でブリュッセル着。友人の鎌田氏宅に荷物を預けて軽装で各地をめぐることになる。ブリュッセルは丘陵から低地へ移る地帯にあるため起伏の多い町となっている。旧市内の中心グラン・プラスは石畳みの広場。ゴシックやバロック様式の市庁舎やギルドハウスに囲まれ、歴史の厚みを感じる都市景観。これに対してビジネス街のビルやEC本部の建物が近代都市景観を代表している。都心部をぬけると大きなソワーニュの森に入る。閑静な雰囲気。霧でもかかると不気

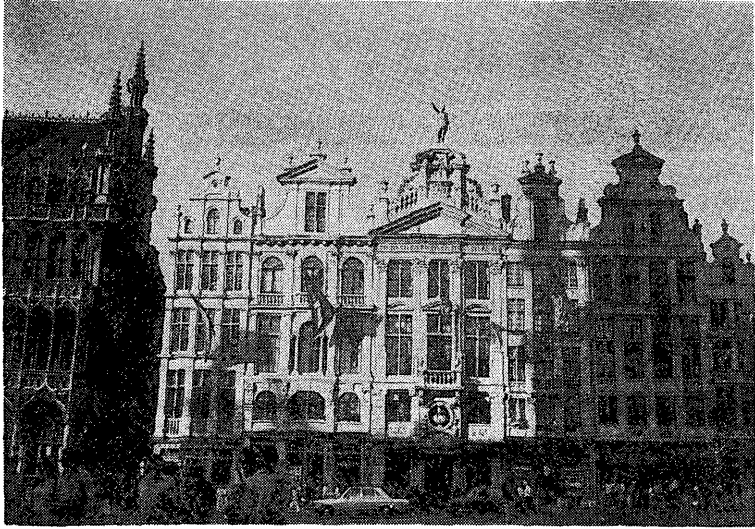


写真1 旧市内の中心グラン・プラス（ブリュッセル）

味だという。緑の豊かさはヨーロッパ都市の特色。この森を出はずれたテルビュールンに「王立中央アフリカ博物館」がある。この辺りは、もと狩猟場で、ブラバント公の城などがあつたり、王室とゆかりの深い土地だった。立派な石造の建物で、28mの高さをもつ大ホールで両翼がつながり、中庭を囲む形になっている。

海外博物館として1898年にスタートしたが、現在の建物はフランスの建築家によって設計され、1910年に完成したものである。博物館に続く庭園が美しく、環境との調和がすばらしい。

展示は民族学と自然史に大別されるが、民族学関係の展示を中心にみる。地域的には、ザイール（旧ベルギー領コンゴ）のものが多く、部族別に陳列されている。隣接のカメルーン、ナイジェリア、ガーナ、象牙海岸などギニア湾岸から、内陸のマリのドゴン族、オートボルタのクルンバ族などにもおよんでいる。オセアニア（とくにメラネシア）のものも少しあ

る。ガラスケースを用いたオーソドックスな展示だが、仮面、楯をはじめ母子像、宝貝を使った台座、楽器等々、豊富なコレクションに圧倒され、アフリカ人の造形のエネルギーが迫ってくるようであった。かつてコンゴ博物館とよばれた時代もあり、植民地支配時代に収集したものがかなりの部分を占めているようだ。

民族資料のほかに熱帯アフリカの農林業生産に関する展示、ザイール産の昆虫類や世界的にも有名な鉱物の展示が充実しており、印象に残っている。

ブリュッセルからアムステルダム経由で雨の中をアルンヘム到着。「オランダ野外博物館」の館長自らの出迎えに恐縮する。アルンヘムの町を出はずれたブナと柏の森の中に野外博物館がある。この野外博物館は1918年に開館し、現在国立博物館の分館となっている。館長室ですばらしく大きな新しいシステムの民博に大変興味をもっていること、これからの発展を期待していると言われる。民家の

話、特に日本の民家やその保存のことなどについて話す。

雨の中を子供の団体をはじめ多くの人々が来訪している。毎日3千人近い入場者がある。車で広い44haの野外博物館をまわる。一棟に居室、広土間、家畜舎が集まった低地ザクセン風の民家や、大型のフリース型民家などが多く、水路をとりいれて低湿地の景観を復元したりしている。風車も数種ある。水車動力による農村の製紙工場、織物など作業風景もみせる。オランダ各地の民俗衣装や、農具の展示棟があり、移築農家の室内をうまく利用している。古い農具とその背後に現在の農具の写真パネルがあり、比較できるよう配慮している。豚、馬、鶏なども飼っていて、生きた農村生活の再現をはかっている。オランダの伝統的農村生活の姿をみるには絶好の野外博物館である。

アルンヘムから北上して、ヘンゲロ方面へ。車窓からは博物館でみたのと同じ

草葺民家が数多くみえる。北部オランダにはかなり草葺民家が残っているようだ。ヘンゲロからドイツ車輛のブラウンシュバイヒ行に乗る。

西ドイツに入り、オスナブリュックに一泊し、翌朝ニーダーザクセン州西部の坦々とした平原を走る。78年夏のヨーロッパは涼しく、列車にはスチームが入っている。地方町クロッペンブルクにある「**野外村落博物館**」で調査をする。

ブレーメンはウェーゼル川の河港都市。ウェーゼル川と波状の水濠の間が旧市街となっている。水濠の辺りは緑地となり、風車もみえる。豊富な民族資料をもつ「**海外博物館**」は大改造中で休館であった。マルクトプラッツを市庁舎や教会などがとりまく。旧市内はハンザ都市の面影を偲ばせる石造や煉瓦造りの町並み。観光客であふれている。

ハンブルクでは、南郊にある「**キーケベルク野外博物館**」と北郊の「**ハンブルク民俗村**」や、フッスムの市中にある

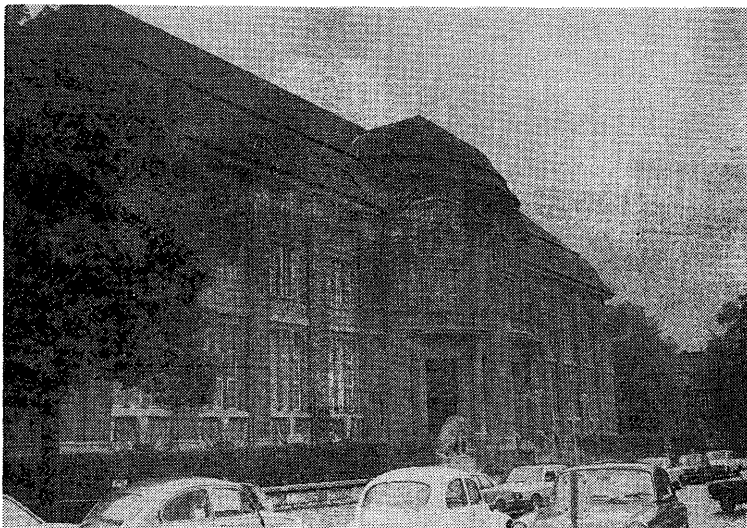


写真2 ハンブルク民族学博物館

「オステンフェルド民家野外博物館」などをめぐった。いずれも広土間をもち、居室、家畜舎、倉庫を一棟に集めた北ドイツ特有の単一家屋（低ザクセン型）が展示されていた。

「ハンブルク民族学博物館」はアルスター湖に近い静かな場所にある。中庭をもつ煉瓦と石造の堂々たる建物で、展示場は1・2階にある。この博物館は1850年頃から準備がはじまり、ハンブルク・ハンザ都市評議会を中核とした募金などによって1879年開館している。大貿易港ハンブルクの世界的な商業活動を通じて、アフリカや南太平洋のドイツ植民地で活動した商人や船長、植民地官吏、探検家たちから多くの資料がもたらされた。付属研究所も作られ、1908-10年北メラネシア、ミクロネシアの調査研究も行われ、収集品を充実させたという。戦後も収集活動は続けている。ゆったりしたエントランスホールには売店があり、研究所の出版物などを数多く並べている。まずアフリカ展示。西アフリカやザイルなど各地の弓、木彫、楽器等々豊富な資料に圧倒される。写真パネルによる解説も加わる。ブッシュマンの民族資料が珍しい。

エジプトのミイラ関係の展示コーナーもある。2階には特展会場があり、中国のレース、書道関係、陶器類などが出ている。2階の常設展示場は南米、北米と続く。ガラスケースを使った展示が主だが、写真パネルを用いた解説もある。

アジアは中国、日本など、それぞれコーナーをもつ。日本展示は座敷で茶をたてる情景を示した大型レプリカ。東南アジア、インド、ネパールと続く。東南アジアでは、インドネシアのスマトラ、アンダマン諸島、ニコバル諸島などのもの

が揃っている。円形高床住居の写真も貴重だ。オセアニアは広いスペースを占めている。大きなドーム状の展示場は天井が高く、メラネシアのシアシ諸島の大カヌー、パプア・ニューギニアのマプリックの大神像など空間を十分に生かしている。小型だがカヌーが数隻壁面に三つずつ立体的に展示されているのもすごく迫力がある。

ポリネシア展示場はマオリの集会所などを中心としているが、改造中で残念だった。

南太平洋の仮面のコーナーは印象的である。イリアン・ジャヤのミミカ、アスマット。パプア・ニューギニアのセピック川流域、ビスマーク諸島、パプア湾岸、ブーゲンビル島。トレス海峡、ニューヘブリデス、ニューカレドニア北部など主としてメラネシアの仮面が集められている。

展示場は暗室で、来客のたびに職員がボタンを押すと、無気味な民族音楽が流れ、暗闇の中の立体的に並べた仮面にスポットライトがあたり、まさにおどろおどろしい感じを出している。古い展示法と共に新しい方式の導入も試みている。当館の出版物、民族学入門シリーズ19として、各仮面の詳細な解説をした H. テイッシュナーの「南海の仮面」が出ている。

1階へおると、ソ連展示。シベリア諸民族文化の展示が多い。革命の歴史などもパネルで解説している。中央アジア、トルコ、西アジアではじゅうたんが目立つ。ドーム状の展示場を利用して中央アジア遊牧民の移動式住居ユルト（円形平面）がおさまっている。

この博物館の民族資料は膨大で、ほぼ

世界全域を包括している。特にオセアニアやアフリカの民族資料が豊富なのは、独自の探検調査や植民地支配時代の収集、研究スタッフの努力も大きい。大港市ハンブルクの繁栄時代とも結びついているように思われる。

### 3. 北欧諸国へ

プッツガルテンから連絡船で約50分、デンマークに入る。みごとな散村景観が車窓に展開する。コペンハーゲンとは前回、国立博物館や郊外リングビイの野外博物館をみているので今回は素通りし、連絡船でスウェーデンへ。水中翼船なら40分位だが、連絡船は一時間半かけてゆっくり進む。観光的要素も強いが、船には免税店があり、物価高の北欧では買物目的の人達がこの船をよく利用している。小雨に煙るスウェーデン南部の港町マルメーに着き、すぐにルンドに向う。

ルンドには、古い大学があり、木骨構造（ハーフチンバー）と煉瓦造りの古い町並みが残っている。駅から10分ほど歩くと小公園に面した「**ルンド文化史博物館**」がみえてくる。

この博物館は1891年に開館したというから、スカンセンと同じ年だ。南部スウェーデン（特にスコーネ地方）の収集品が中軸になっている。1890年以降に発掘した考古学資料、武器のコレクション、織物、スコーネ地方の民俗衣装、ガラス器のコレクションがよく整備されている。別棟の大きな旧家畜舎には、階下に農村地帯の荷馬車類、2階に木造農家の屋内部分展示がある。道路をへだてた一区画は町家と農家の野外博物館で、屋内に陶器類、鍛冶屋の道具類などを展示した建物もある。1652年に建った木造、木片

（こけら葺）の壁面をもつ古びた教会は、スウェーランド地方から移築したもの。丁度結婚式が終ったところで、新カップルを囲んで人々が集っている。木々の緑と赤茶色の教会といった地味な色調に華やかさをそえていた。

マルメーを出た列車は、南スウェーデンの農業地帯スコーネ平原を走る。平坦だが、ルンドを過ぎて漸くすると少し起伏がでてくる。集落は散村状で、中庭を棟続きの建物がとり囲んだ大型農家もみえる。しかしスカンセンに移築してあるような草葺は少なく、大半は瓦葺になっている。木造家屋は赤茶色に塗ってあり、窓枠などを白く塗っている。牧場と麦畑、石積みのフェンスもある。アルベスタ辺りから湖も多くなり、針葉樹林が目立ってくる。小丘の上に小村落が立地しているが、氷堆石の丘かもしれない。マルメーから6時間半余、近郊地帯から美しい入江、岩盤の上の市街地、市庁舎の塔がみえる。ストックホルムの発祥地ガムラ・スタン辺りもみえ、石造の建物が貫録を示している。

ストックホルムでは、世界で最初に開館した野外博物館「スカンセン」や「**北方博物館**」を再訪し、旧市街ガムラ・スタンをまわった。

ストックホルムから北西へ列車で5時間、木造家屋の豊庫といわれるダーラナ地方へ向う。ストックホルムを出て1時間余、山地にさしかかる。樅、白樺などの混交林。スカンセンでみたのと同じ木造家屋が目につきはじめる。丸太組積造り（校倉造り）が多い。レークサンドは祭りなどで名高い町。木材の集積場ではスプリングラーが活動している。大きなシリヤン湖に沿って進む。五月柱（マイス

トンガ)の小型のものを庭先に立てている農家もある。夏至祭の前日に豊穡を祈って白樺などの木を美しく飾り、広場や庭先に立て、一年間そのままにしておく習俗は、とくにダーラナ地方によく残っている。

ムーラは、スウェーデンの代表的画家アンダーシ・ツォーンの生れた町で、これを記念した絵画を中心とした「ツォーン博物館」、「ツォーンの家」、「ツォーン野外博物館」がある。野外博物館は町並みを少しはずれた緩やかなシリヤン湖畔のスロープにあり、ダーラナ地方の古い民家を集めている。主要家屋には生活用具類も多く展示してある。大きな五月柱が立っている。木の香りが漂う中で調査を進めた。

ウプサラは古い大学都市として知られている。美しい教会の尖塔は15世紀の建築といわれ、北欧最大級のもの。北郊にあるガムラ・ウプサラは三つの円丘があり、ウプサラ発祥の地で13世紀までスウ

ェーデン王の居住地だった。現在この一画に規模は小さいがよくまとまった「ウプサラ野外博物館」がある。

赤茶色に塗った木造組積造り(丸太より角材が多い)の民家が3群。主屋と付属建物が中庭をとり囲むようにして建っている。その他風車もある。この野外博物館の職員は、若いケーツホルム女史をチーフに3人いるが、これに機織りなど実演をする人が加わる。犁類をはじめとする農具、木箱やバターづくりの桶など生活用具類も多く、貯蔵庫には乾魚、ソーセージなどがぶらさがり、特有の臭いが漂っている。生活感を出そうとしているのであろう。ウプサラの伝統的の年中行事もこの野外博物館で催すという。4月から9月まで開館しており、職員は冬季は町にあるウップランド博物館に戻る。少人数だが、熱意あふれる人達で民家を保存し、研究している姿は実に心強かった。

ストックホルムから純白のスマートなスベア・コロナ号でヘルシンキに向う。

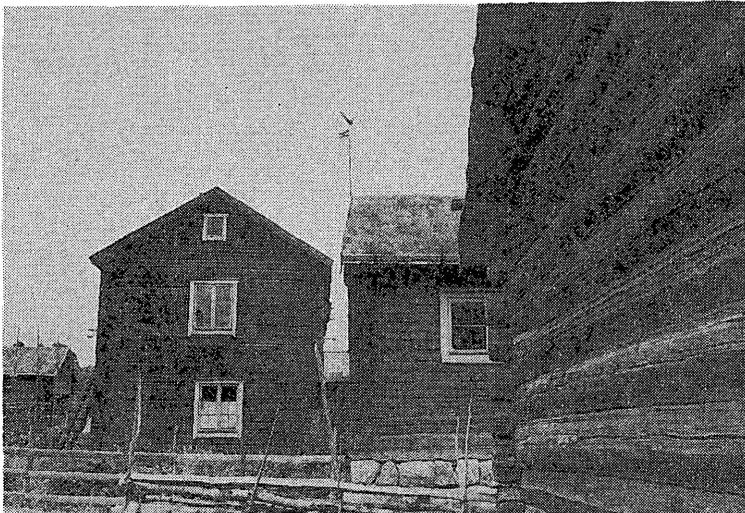


写真3 ウプサラ野外博物館の木造組積造り(校倉式)民家





写真4 カレリア地方の丸太組積造り民家（セウラッサーリ野外博物館）

夕方6時出帆，小島の多い氷食の入江を航行し，外海へ出るまで2時間近くかかる。翌朝時計を1時間進める。ヘルシンキ港から丘の上の古風な教会が望まれる。岩盤の露出が目立つ。

ヘルシンキでは，日程の関係で「**セウラッサーリ野外博物館**」の調査に集中する。

サーリは島の意だが，緑深い島全体が公園となり，その一部分が野外博物館となっている。可憐な白い橋を渡る。木造丸太（角材）組積造り（校倉式）の民家や倉庫が白樺林の中にみえる。橋畔に大きな五月柱が立っている。五月柱を立てる習俗は南部フィンランドにもあるが，スウェーデンの文化的影響である。フィンランド全土から代表的な民家や風車，教会などが集められている。フィンランド特有の毛足の長いじゅうたん（リュイユ織り）や民具を展示した棟もある。カレリア地方（現在ソ連領域）の農家は大きく，素朴な丸太組積造りである。

静寂そのもののセウラッサーリも夏至祭には大変な人出になる。

この野外博物館は国立博物館の一部門になっている。調査に協力して頂いたアイロネン女史などは夏季25人のガイド（大半大学生のアルバイト）と共に大童であった。ガイドはフィン語，スウェーデン語，英語，独語の四種類があるのも興味深かった。自然のすばらしい環境とその活用，すでに70年の歴史をもつ野外博物館である。

ヘルシンキから753km北上したオウルは，フィンランド中北部最大の都市である。車窓からの景観は単調だが，タンペレ周辺はまさに森と氷河湖。沿線付近の牧草地では乾草刈り風景。丸太組積造りの乾草小屋がまだ相当残っている。この小屋はスウェーデン中北部にかけて分布している。

オウルではオウル川を15km遡江した川中島にある「**ツルカンサーレン野外博物館**」を訪ねる。針葉樹の森を歩いた

が猛烈な蚊の襲来に悩まされる。近くにいた老夫婦が教えてくれた木の枝で追払いつつ進む。野外博物館のある川中島は15—6世紀市場と漁村だったという。1961年に開館している。木造の古い教会、木造丸太（角材少し）組積造りの民家、小屋、サウナ、風車など、いずれもオウル川流域のものを集めている。家族づれ、若いカップルなどが夏の午後のひとときを楽しんでいる。二人の老バイオリン弾きが民謡を奏でる。陶器づくり、靴づくりなども一つの建物で演じている。帰路は船でオウルの町へ。川の兩岸の風景がすばらしく牧歌的であった。この涼しい中を短い夏を惜しむかのように泳いでいる人達に驚く。

オウルからボスニア湾の最奥部をまわってトルニーヨ川を渡る。ここがフィンランドとスウェーデン国境。パスポート検査も何もない。ただ時間を1時間遅らせる。

峡湾（フィヨルド）地形をみるためボデンから北上する。山々は高原状で、日本の山のように急峻ではない。白樺、松などの樹林がやや低くなっている。湖もところどころ。やがて北極圏に入る。北緯66度30分の標示板があり、列車はこの付近のみスピードを落してサービス。湿原が多くなり、白い花が咲き乱れる。エリバレは山間の鉄鉱山町。標高500m辺り湿地の連続。奇怪な山はキルナ鉄鉱山である。ここに一泊したが、白夜で午前1時でも鉄鉱山や引込線がはっきり眺められる。1885年から鉄鉱石の採掘がはじまり、高品位の鉄鉱石とて、今世紀に入って急激に発展した町（人口3万人）である。「真夜中に太陽をみる」ツアーや鉄鉱山見学など観光客の誘致も熱心だ。

郊外にラップの民族資料を集めた小野外博物館がある。

気温12～3度。キルナから1時間余、大きな氷河湖がみえはじめる。周辺の間々は高原状で1,000m級、いずれも激しい氷食をうけた地形である。1時間近く湖畔を走る。山腹に残雪。遠い山は白銀に輝いている。湖がきれると全く高原の岩山の連続、岩肌が灰色がかって冷たい感じを与える。登山をする人達が下車する。なだらかな高原をのぼりきる辺りが国境で、ノルウェーに入る。

まもなく景観が一変する。ほぼ垂直に落ち込んだ氷食谷の物凄さ、支谷の急瀑（懸谷）。やがて谷が少し開け、フィヨルド最奥の小平地がみえ、典型的なフィヨルド地形が展開してくる。峡湾に落ち込む谷壁の中腹を列車は下って行く。防雪トンネルが多い。

終着駅ナルビクは町の上にある。住宅地が山腹にのび、カラフル。この鉄道はキルナの鉄鉱石を不凍港ナルビクへ搬出するために敷設したものだった。貨物専用線路は海岸までのびて船積みできるようになっている。

ナルビクからボデンに引返し、強行軍だが夜行列車で南下する。翌朝ブラッケで乗りかえ、イエムランド州の中心都市エステルズンドにある「**イエムランド野外博物館**」を調査する。

国境の町ストールリェンからバスで再びノルウェーに入り、大きく開いたフィヨルド沿岸に位置するトロンハイムに至る。

「**トロンハイム民俗博物館**」は市の西部丘陵地帯にある。ノルウェー中部の民家を60余棟移築している。民具類なども2万点ほど所蔵している。館長アリスビ

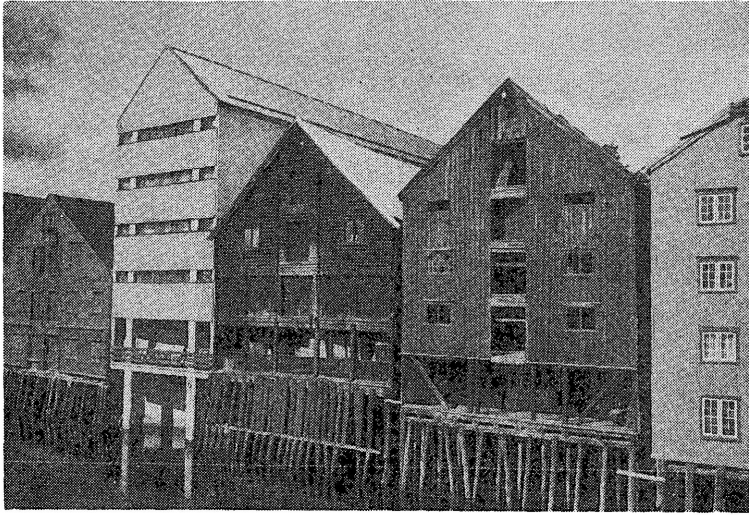


写真5 古い木造倉庫群(トロンハイム)

ック氏と助手2人が正職員で、3人の補助員とガイド6～8人。夏季は来客が多く、特にフィヨルド巡航の観光船の入港時は賑う。城址の高台からトロンハイムの町が遠望できる。中部ノルウェー各地の代表的民家を中心に調査を進める。トロンハイム旧市街の町家も4棟移して小町並みも作っている。敷地内の農地にオート麦などを栽培しているが、近くの農民に土地を貸しているという。地形に変化のある環境が素晴らしい。

オスロ行き急行列車はトロンハイムの町をぐるりとめぐり、河岸段丘、海岸の入江、変化に富んだ地形。農家や倉庫(ロフト)、主屋と付属建物3～4棟が中庭を囲んだような型も多い。すぐ山地にかかる。ところどころ屋根に白樺の皮を敷き草を植えた古風な民家が見える。残雪のある岩山、丸味をおび、氷食のあとが明らかに認められる。分水界近い高原を過ぎる。ドンボース付近はまるでスイスのような美しい景観。このあとリレー

ハーマまで、U字谷と斜面の村々、木造丸太組積造りの民家に混って新しいカラフルな住宅、古い純木造のスターブ式教会もみえる。斜面の土地利用も面白い。

トロンハイム——リレーハーマ間はヨーロッパの車窓景観では1—2を争うすばらしいコースである。

リレーハーマの町の背後は急坂で、町全体が湖畔の傾斜地に立地している。住宅街をぬけると緑のスロープ、近代的な展示館がみえ、背後の森が野外博物館「サンドヴィック・サムリンガー・マイハーゲン」。館長のファーレン=センドスタット博士に会う。日本の民家写真などを贈る。館の成立ち、ノルウェーでも近年古いものが失われており、文化財保存が急務であることなど次々と話される。

創設者は歯科医師のアンダー・サンドヴィックで、彼は転地療養に来てそのまま住みついた。そしてリレーハーマやその周辺(オップランド地方)を歩き、産業革命や工業化などのため伝統的生活の



写真6 屋内で糸繰り作業（リレーハーマ野外博物館）

変化や農村文化の減少を憂い、民具収集や民家を集め、1904年に開館した。現在39 ha の面積で110棟の建物が集まっている。この野外博物館の特色は、まず自然環境の良さ。一地域（オップランド）の民家を集めているので、その発達過程や系統などを理解しやすいし、地域内でのバリエティを確認することも可能だと云う。

今は州からの補助もあるが、インフレで財政は苦しいらしい。オップランド地方の伝統的コスチュームを着た女性がガイドしてくれる。丸太組積造り(校倉式)が主だが、ロフト(倉庫、2階建がふつう)や納屋など付属の建物が多い。主屋は寝室、居間(台所)、玄関の3室が基本である。居間の壁や天井を花模様などで彩色した家もある。

純木造で束や梁式のスターブ式教会もある。数棟の建物で機織りなど作業風景もみせている。現在町家を数棟移築中であつた。

野外は一地方のものを集めているが、新築の展示館はノルウェー全土から集めた櫛、木箱(長持)、じゅうたん、民俗衣装、銀やガラス製品などのコレクション展示がある。

傘造り工房、馬具、毛皮商、鍛冶屋、印刷製本工房、銀細工、タバコ・パイプ造り、木靴造り、車大工、時計屋などの作業場や店を復元したものが多く、実にすばらしい。特展場ではヨーロッパ諸国の陶器類などが展示されていた。

北欧では大型の博物館の一つである。

馴鹿の肉の煮込み料理などを御馳走になったり、心暖まる歓待をうけ、能率よく調査を進めることができた。

オスロから再び夜行列車の強行軍でコペンハーゲン経由、フェリーでフューン島に渡り、オデンセに着く。アンデルセンの生地と古い町並みが残っていて観光客が多い。デンマークには、オーフスやオデンセなど木骨構造の美しい町家が残っている都市が多い。

旧市街を通り近郊住宅地に接した森に「フューン村野外博物館」がある。

フューン島各地から集めた草葺の木骨構造の民家が多く、壁を白や赤色で塗ったものもある。建物が棟続きで中庭を囲んだもの（デンマークに多い）や、L字型など多様で、スカンジナビアの民家型式とは異なっている。風車はどの野外博物館にもみられる。

ユトランド半島では、ランダースからローカル線で農村地帯を進み、ビンデラップで下車。無人駅として、車掌が電話でタクシーをよんでくれたので大助かり。しかし列車は数分遅れた模様。「ヤール・ヘーデ野外博物館」は大変不便なところにある。殆ど車が団体バスでやってくる。この野外博物館は、伝統的農村生活の展示を主としているが、歴史（先史）村と森林博物館が加わっている。先史村のところでは、例えば石器時代の服装をしたアルバイトの学生が実演・解説をしている。ヤール・ヘーデは不毛の砂丘地帯を利用したもので、全く自然の中にあり、農牧林業を営む生きた姿をみせようとしている。

ストイアからユトランド半島を斜断し、フレデリシアからハンブルクに向う。北欧では車内で屢々、米人の旅行者と同室だったが、殆ど円高ドル安が話題となった。一人だけ野球ファンがいて「王の800号はもう出たか」と質問していたのが印象に残る。

#### 4. 西ドイツ各地をめぐる

ハンブルクで友人の大阪市立大学地理学教室の中村泰三氏と合流し、再び西ドイツ各地をめぐる。

リュースブルクはハンブルクから40分

余。ヨハネス教会の尖塔がみえ、エルベの支流が町の中央部を流れる。川畔に古いクレーンが残っている。中世まで遡る古い歴史をもち、岩塩の埋蔵と取引きで栄えた町である。戦火を免れたため、木骨構造（ファッファベルク）でその間を煉瓦の化粧積みにした古い町家が残っている。

リュースブルクから国鉄バスで東独国境に近いルチョウに向う。アウトバーンを走る。低ザクセン東部の平原。牧場、オート麦、大麦、甜菜、馬鈴薯畑がひろがる。妻入で半寄棟の屋根をもつ低ザクセン型の農家、壁面は木組の間に煉瓦を積んだものが多い。入口上部に建築年代など文字を刻んだ農家、妻側の棟飾りをもつ家々。ダンネンベルク、ルチョウなど地方町の中心部はいずれも木組の美しい木骨構造の町家が並び、北ドイツ特有の都市景観を示している。

2.5万分の1地形図をたよりに円村の見学に出かける。集落形態の分類は、家屋の集合の状況によって集村、散村に分類することが多いが、ドイツではマイツェンなど多くの学者によって幾何学的な形態などを考慮した詳細な分類が行われている。この中で集落の中央に円形の広場をもつ円村（環村）が、エルベ川流域にみられることが指摘された。その後円村の研究はクレンツリンら地理学者によって進められているが、この円村をぜひ訪ねてみたかった。ルチョウの西部には円村が数多く分布しているが、時間の関係で町に最も近い（2 km）、レーツェ村を見学する。20 mの等高線が走るほとんど平坦に近い田園地帯。オート麦、甜菜畑が続き、乾草を倉庫へ収納する風景もみえる。円形の広場に立つと、妻側を

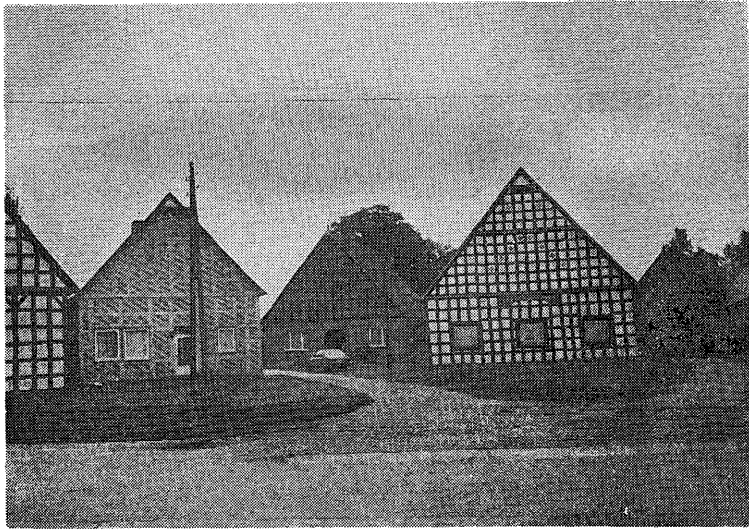


写真7 円村レーツェ村の木骨構造の民家

向けた木骨構造の農家とりまいている。木組の数が他に比べて多く、窓がシンメトリックに配置してあり、壁面を淡い黄色、緑色などに彩色している。広場はコンクリート舗装してあり、農道が2-3本放射している。トラックターや車も入ってくる。広場に面する家屋の背後は農地になっている。村人も起源については知らなかったが、スラブ民族の残っていた村落形態であるとする説がある。

円村の一典型をみることができたが、単なる訪問に終って残念であった。

低ザクセン州の首都ハノーファーを経てビーレフェルトで支線に乗りかえる。

デトモルトは北ライン・ウエストファーレン州の北東部に位置する町。かつてリップ候の本拠地であった。町の南側に200 m 前後のトイトブルクの森(丘陵)がのびている。ここに「**ウエストファーレン伝統農村文化野外博物館**」がある。

五つの屋敷(主屋、付属建物、生活用具類)がその移築前の環境にも配慮しな

がら地域別に配置してある。現在拡張工事中で完成時には80ha(現在30ha)になり、広場をもつ村落を復元する計画がある。解体された資材がセットになって幾つも山積みされ、トタン屋根をかぶせて保管している。規模、内容共に充実した野外博物館ができそうである。

ボンでは、ボン大学日本文化研究所所長のJ.クライナー教授(丁度民博客員教授として滞日中)の御配慮で、同研究所のE.パウアー氏に案内役をして頂いた。パウアー氏は日本の経済史を研究している俊英。経済史との関連で日本の民具類にも深い関心をもっている。夫人も日本研究家で丁度滞日中だった。

ケルンの「**ラウテンストラウホ=ヨースト博物館**」は、旧市街の南はずれにある。石造の建物で、1901年開館し、戦災後1967年再開されたという。まずアメリカ展示、次いでアフリカ、オセアニアをみる。展示品が豊富で、アフリカのベニンのものなどすばらしい。オセアニアで

はメラネシアが中心。ガラスケース、露出展示など多様だが、背景の色調にも工夫がこらされ、全体にモダンな展示になっている。展示品は概して民族芸術的なものが多く、生活用具類などが少ない。これをパネル解説で少しは補っている。解説は文字が小さく読みづらい。

階上のインドネシアの資料は豊富で、スラウェシのトラジャ、スマトラのトバ・バタック、ニアス島のもの。1930年代撮影の集落の写真など貴重。階段にスチールパネルで日本などの展示をしている。

この博物館はケルンの豪商オイゲン・ラウテンストラウホが義兄の探検家ウィルヘルム・ヨーストのコレクションを基

礎に開館したものだが、現在州が財政援助をしている。

特展は「北東ニューギニアの原始民族芸術」で、パプア・ニューギニアのヒューオン半島を中心とした地域の収集品。仮面や木彫などが多く、民族芸術的な内容であった。

有名なケルン大聖堂の隣にローマ時代の遺跡が発見、発掘され、ここに「ローマ・ゲルマン博物館」が移っている。

ライン川を渡り、郊外のベルギッシュ・グラードバッハ。町を出はざれると丘陵地帯が続く。緑に包まれた広大なパウアー夫人の実家で手づくりの昼食を御馳走になり、近くの酪農家を見学する。木

組の整った住家で、壁の一部にスレート石をはりつけている。経営面積 30 ha で33頭の乳牛を飼う。そのため家畜舎、飼料や乾草、農業機械を収納する建物が広いスペースを占めている。

3 km ほど離れたもう一つの農家は、大型酪農家で、新旧のサイロが目立つ。乳牛の糞尿の処理方法、搾乳法など機械化が進んでいる。

翌日はパウアー氏の車で出発。平坦なラインラントもアイフェル地方に近づくと地形も少し起伏がでてくる。

ホステル村は60戸よりなる集村。木骨構造の家々、黒味がかった木組と白壁のコントラストは絵画的ともいえるほど美しい。長屋門をもち中庭を農機具小屋、納屋、車庫、住家で囲んだ型が多い。酪農家を訪ね、二人の農夫から話を聞く。乳牛22、仔牛60余頭を飼育し



写真8 美しい木骨構造(ホステル村)  
[中央はE・パウアー氏]

ている。1930年代の乳牛舎は煉瓦造り(25×10 m)で少し古びているが、当時はボンの農業協同組合のモデル乳牛舎だったという。経営耕地 60 ha、半分は牧場・牧草地。他の畑で大麦、とうもろこし、小麦などを栽培する。牧草生育の条件としてはアイフェル山麓地方に比べて雨量が少なく、良好地とはいえないとのこと。60戸のうち11戸が農家、うち10戸が酪農経営である。他の多くは通勤的職業に従事している。この辺りは道路条件もよく、ライン工業地帯の近郊農業地帯だが、圃場整備や相続の問題、農業経営の困難性など多くの問題をかかえている。

主屋の古い部分は17世紀に建ており、木骨構造で木組の間は柳の枝木を組み、その上に土を塗り、漆喰で仕上げている。新しい部分は煉瓦を用いている。

全戸瓦屋根。第二次大戦が終った当ても草葺は牛小屋一つだけだったという。

パウアー氏の配慮でラインラントのアイフェルに近い一農村を見学できたことは大きな収穫であった。

ライン地方の田舎町コンメルン背後の丘陵地(300~340 m)は混交林に包まれている。この丘陵に75 haの広々とした敷地をもつ「**ライン州野外博物館(州立民俗博物館)**」がある。

日曜日とて大変な人出。入場料は2マルク(他の野外博物館もほぼ200円前後)。

森の中にライン州内の地域別に42棟の農家、風車2、水車1、村の学校、墓地などを配置している。多くは木組のすばらしい木骨構造で、中庭のまわりに建物を配したフランケン型(中部ドイツ型)に属するものである。この博物館は、現在は州立だが1961年開館当時はライン州土地組合の経営であった。

主要建物の屋内では生活用具類を豊富に並べ、パネルを使った解説もついている。

織物、製粉、車大工、木工品、木靴造りなどの実演もある。館長は「ヨーロッパの野外博物館ガイドブック」の著者A. チッペリウス氏である。

1977年に完成した展示館には木彫、織物、聖像、陶器類、絵画などライン地方の民俗文化が展示してある。特展場では「世界の庶民の人形展」子供達で賑わっていた。

ボン大学は宮殿を利用した風格ある学舎。日本文化研究所は文学部に所属している。研究室でパウアー氏から種々日本研究の現況を聞き、その研究の厚みに敬服する。

「**ライン州立博物館**」は、ボン駅に近い。近代的な建物で、外観はオフィスのような感じ。ライン州の歴史や考古学資料の展示が特色となっている。先史時代から時代別に詳細な地図、復元図などを並べてあるのは大変参考になる。ローマ時代、中世の展示スペースもかなり広い。ネアンデルタール頭骨はこの博物館御自慢のもの。全般によくまとまったモダンな展示である。1階には学習室が設けてあり、子供達が機織りの実習をしたりしている。

「**フランクフルト民族学博物館**」はマイン河畔、丁度旧市街の対岸に位置している。小じんまりした建物である。展示場は1~2階で、全館南米のインディオ・ヒバロ族(エクアドル~アマゾン源流-アンデス)の展示で、1977年夏から78年夏までが期間。売店には主要所蔵品のエハガキと数種の特展の案内解説書が並んでいる。ほぼ1年ごとに展示を変える



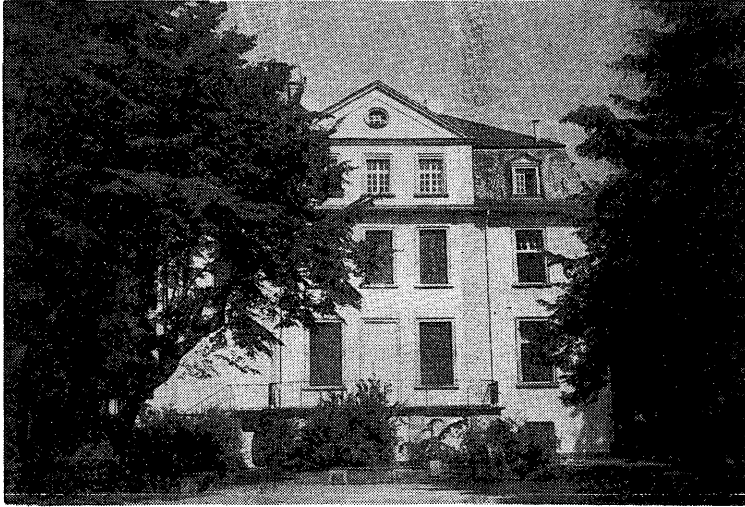


写真9 フランクフルト民族学博物館

とのこと。展示場は計12ある。1階エントランスホールにヒバロ族の民家模型がある。ヒバロ族の概況。狩猟と農耕では焼畑，マニオクのおくぬき作業，つぼ造りなど。社会では伝統的な家長制家族構造や村落の現況。宗教，戦いと祭り等々。全般に「もの」よりもカラー写真，絵図などが多く，わかりやすく解説している。2階はヒバロインディオの青少年達が描いた絵が興味をひく。パネル解説が主だが，ヒバロの社会と植民地化（開拓）の影響，ヒバロ社会の現在直面している諸問題などを提示している。

この博物館はベルリン・ダーレム民族学博物館やブレーメンの海外博物館などとも提携し情報交換をしている。

ドイツ西南部のシュバルツバルト（黒森）には，巨大な草屋根をもつ多層民家があり，わが国の飛騨白川郷の合掌造りに匹敵するものとして知られている。このシュバルツバルト民家を長年にわたって詳細に調査研究しているのは，H. チ

リ先生である。その著書は私の蔵書にもあり，以前からぜひお会いしたく思っていた。今回の渡欧でシュバルツバルト野外博物館に連絡したところ，チリ先生から「博物館のあるグッタハは山の中で不便だから，まず私の住んでいるフライブルクで会いましょう」との親切な手紙を頂いた。

フランクフルトからバーゼル行きの準急列車で出発，午後4時すぎフライブルクに着く。

駅までチリ先生が出迎えて下さる。ホテルの予約までしてもらい恐縮する。先生のお宅は閑静な住宅街にあるアパートで，書斎にはシュバルツバルトの民家模型，民家の絵や写真が飾ってあり，10数種のシュバルツバルト地方の古い時計が時を刻んでいる。合掌造りなど日本の民家写真を囲んで解説したりする。「夕暮れのフライブルクを案内しよう」とのことので町へ出かける。82才の老先生の行動力に感嘆する。旧市街には四つの門と，

その中央にマルクトプラッツがあり、ゴシック式の大聖堂の尖塔が夕陽に映えている。パイプオルガンの荘麗な響き、ステンドグラスの美しさ。

夕食後再度先生宅へ招かれる。明日から調査する参考にとスライド上映。1時間半余り、ワインを飲みつつ情熱をもって解説される。長年の民家に対する愛情がにじみ出ている。先生は建築出身でフライブルク大学の教授であった。10時各種古時計の妙なるハーモニーに送られてホテルへ戻る。

翌朝先生自ら車を運転してグッタッハまで。120 km までスピードをあげて走られる。曲りくねった山道を進み、グッタッハの谷におりる。山頂近くは森林、斜面は牧場と牧草地になり、傾斜面に特有の大屋根をもつシュバルツバルト型の民家が立っている。民家の背面を山の斜面にもたせかけているので、ここから乾草や穀物を屋根裏に入れる。1階は車小屋、家畜舎とぶどう酒倉。2階が居室

と納屋になる。3階は大きな屋根裏になる。

グッタッハの町をすぎ、やがて草葺のシュバルツバルト型民家が見えてくる。

「シュバルツバルト野外博物館」は面積1 ha余で、緩斜面に3棟のシュバルツバルト型民家と穀倉などがあり、水車動力による製材、製粉、鍛冶屋などが集めてある。

山奥とて4月～10月の間のみオープンしているが、1977年は50万人の来館者があったという。シュバルツバルトはドイツ人の「ハイマート」なのであろう。今日も凄い人出である。チリ先生はこの博物館の名誉館長で、館外のレストランの2階に先生を賛える記念室がある。この博物館づくりに愛情をもって取りくまれただけに、各建物の説明も詳細をきわめた。お陰で充実した調査を進めることができた。今回の渡欧では多くの人々の御協力を得たが、特にチリ先生とシュバルツバルト民家の深い結びつきには感動し

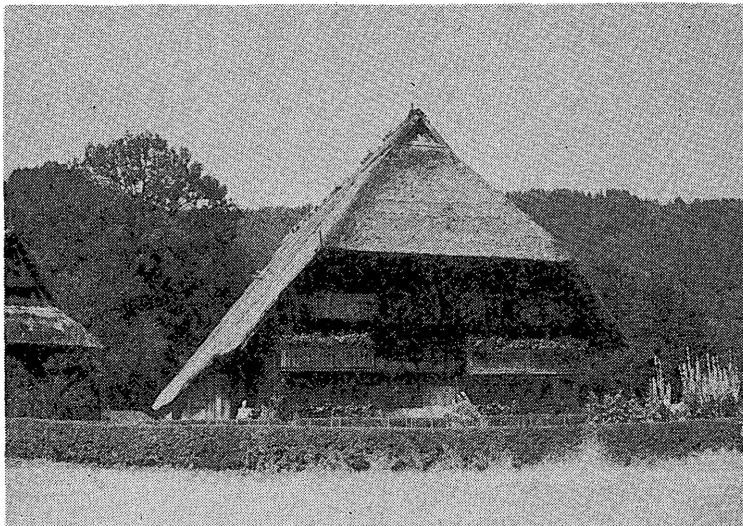


写真10 シュバルツバルト型民家（グッタッハ）



写真11 ボーデン湖の湖上集落復元（ドイツ先史野外博物館）

た。

ボーデン湖畔にある「ドイツ先史野外博物館」の湖上集落（復元）を見学し、リンダウ経由でミュンヘンに出る。

ミュンヘンは博物館、美術館の集中したバイエルンの古都。1971年には「市立博物館」、「ドイツ博物館」、「王宮博物館」、「民族学博物館」などをめぐったが、今回はミュンヘンを基地にし、「上バイエルン野外博物館」の調査に集中した。

ミュンヘンから列車で約1時間、ムルナウで下車。山々が迫り、南ドイツ農村の牧歌的景観がひろがる。コッヘル湖を遠望し、グロスフェイル村から山道をかかなり登る。東アルプス前山の緩傾斜地（標高650~700m）に野外博物館は位置している。

3階建の展示館が入場口。廊下に上バイエルン地方の民家間取り、屋敷配置図、民家屋根型分布図などが展示してある。民家模型もある。3階は生活用具類を陳列してある。屋外は眺望絶佳のスロープ

で、15棟の建物が完成し公開されている。木片葺き石置き屋根で、緩勾配の切妻型。木造丸太（角材が多い）組積造り（校倉式）が多く、スイスやチロルの民家に類似している。室内の生活用具類も木の香り豊かである。1971年に開館し、現在増設中で、完成時には30haの広さになるという。バイエルン州には他に三つの小野外博物館がある。

ミュンヘンでは、バイエルン国立歌劇場で開催中のミュンヘン・オペラフェスティバルに出かけた。この歌劇場の総監督でN響名誉指揮者のサバリッシュの指揮で、ワーグナーの「ローエングリン」。ザルツブルクなどに比べて舞台装置も観客の服装も保守的傾向が強かったように思う。

#### 4. オーストリアからユーゴスラビア北部の博物館巡検

ザルツブルクは人々々々。世界の観光都市になってしまった。1971年の時に比べ

て人の多いこと目の目立つ。ザルツァッハ川を渡り山麓との間の狭い旧市内の端に「**カロリーノ・アウグステウム博物館**」がある。美術工芸、歴史関係のものが主で、1977年出土の土器類なども展示してある。この博物館に属する野外博物館が南郊グロスウィヒマインに建設中。もう一つ民俗学博物館をもっている。

ザルツブルク城の山塊をまわって南へ10 km の山麓に、美しい庭園をもつヘルブルン離宮がある。「**ザルツブルク民俗学博物館**」は離宮背後の山腹にある。もと修道院の建物を利用した小じんまりした博物館。来客のたびに管理人が戸をあけてくれる。

ザルツブルク州は殆んど東アルプス東端の山地で占められ、山間村が多く、民俗資料も数多く集められている。彩色された美しい木箱、人形、織物、各種民具、民家模型と民家写真パネル。鬼の仮面など。豊穰を祈願するペルピトの祭り（1月）に用いる2 m近い各種のかぶりものが面白い。現在でもザルツブルク州のザンクト・ヨハンなど山間部で盛んに行われている。3階からの眺望は全くすばらしい。ヘルブルン離宮の庭で今夜演奏するバロック音楽の練習をしているのが聞えてくる。

ウィーンでは、ウィーン大学留学中の知人山下一道夫妻の車で能率よく博物館をめぐることができた。

ウィーンの「**民族学博物館**」はホフブルク宮殿の一画にある。7年ぶりの訪問である。

ラテンアメリカ、北米、アフリカ、オセアニア、アジアに大別され、40万点という膨大な民族資料を誇っている。ハプスブルク家を軸とするオーストリアの歴

史を反映しているようでもある。前回に比べて展示が少し変っている。ガラスケースを主とした伝統的展示法が主だが、ウィーン学派の本拠地にふさわしい充実ぶりである。オセアニア（特にメラネシア）、アフリカ、ラテンアメリカは貴重な展示品が多い。ハワイのカメハメハ王朝を主とした展示は特別展で、ホノルルのビショップ博物館からの出品もある。

ウィーン「**民俗学博物館**」はウィーン大学から西へ数ブロック、淡い黄色の建物。オーストリア各州別の展示と、イタリア（旧オーストリア南チロル）、南ドイツのものも陳列している。農具、ぶどう搾りの道具、渋い彩色の大きな戸棚、その他生活用具類がぎっしり。ガラスケースのほか露出展示も多い。

仮面、民俗衣装もよく集めている。民家はこの博物館の創設にも関係の深いM. ハバーラント教授らの力作。チロルとリンツ付近の民家模型、家屋内部の部分展示もある。各種分布図による解説も親切だ。展示スペースは小さいが、エーゲルラント地方の古民俗の夏季特別展を開催していた。博物館中庭には道標やユニークな看板なども集めてある。

本館出版の論文集も売店に並べてあり、研究活動も着々と進められているようであった。

ウィーンでは、その他、「**低オーストリア州立博物館**」「**ウィーン市立博物館**」を見学したが、ウィーン市内には実に多くの博物館が集っている。

ウィーンからダニューブ川を渡り北上する。小さな森がところどころにある緩やかな丘陵が続く。ドイツ中部に多かった木組の美しい民家はなく、石や煉瓦造りの民家が多い。

小麦、とうもろこし畑にまじって、ぶどう畑も多い。アスパルンはウィーンから30km、街道に沿った小さな町。城が「低オーストリア先史考古博物館」となっている。

城の裏側にある広い庭園はこんもりとした木立ちの静かな環境。そこに先史時代の復元家屋などが11配置してある。風雨を避けるだけの原始的なシェルター。マンモス狩猟時代のテント、半地下式の鉄器時代の家屋など。古い時代のパン焼窯が復元しており、パネルに伝統的なパンの作り方が示してある。小学生の団体などが来ると、その窯を使ってパンを焼かせ、体験学習ができるようにしてある。城内の展示場は1-2階。地史、人類の起源と発達から旧石器、中石器、新石器、鉄器時代まで時代区分している。主として大パネルは木目のある板を用い、そこに地図や絵図などがついているので落ち着いた特有のムードがある。実物のほか、写真パネル、レプリカも多く使っている。低オーストリア、オーストリア全土、ヨーロッパ全域の各種分布図もよいが、解説が詳しくすぎるようである。先史時代の時代別家屋の特色も参考になるし、先に訪れたボーデン湖畔の杭上家屋の図もある。

このような田園地帯にユニークな博物館があるのは全くすばらしい事である。

隣の「ワインランド博物館」は、1632年に建った修道院の建物を利用して。ぶどう栽培の歴史、ぶどう酒醸造に関する諸道具、生活用具類、民俗衣装、村の小学校の教室、キリストの聖像などが展示してある。中庭に各種の道標が集めてあった。アスパルン地方の郷土博物館である。

「オーストリア野外博物館」はグラーツに近いステュービンクにある。駅からやや南よりの谷あいには細長くひろがっている。鉄道線路をくぐった谷口に博物館オフィスがある。案内書やエハガキ類も売っている。子供連れや若い人達が多く、森の中の小道は涼しく心地よい。この奥行き深い谷あいにはオーストリア全土から移築した43棟の民家、その他教会、水車、製材所、鍛冶屋などの建物がある。低オーストリア、チロル、ケルンテン等々地域別に配置してある。閉庭型の大きな農家はリンツ付近特有の型。最奥部にプレゲンツやチロル地方の民家が多く、緩勾配の切妻屋根に石がのり、谷の斜面に立っている。階下は家畜舎、貯蔵庫、2階が居住部分となっている。オーストリアの代表的野外博物館である。館長のベッテラー博士による解説書は充実したものであった。

グラーツはオーストリア第二の都市。「スタイアマルク州民俗・民族学博物館」は城跡のある小山の麓、旧市内にある。

展示場には農具類や糸車、木箱、羊毛梳き、木製背負具、チーズプレス、バターつくりの桶、ゆりかご、照明具など生活用具類が豊富に陳列されている。スタイアマルク州の民家写真と屋根型、屋根材料などの詳しい分布図が目玉される。民家の屋内の一部分（台所や居間）を移築したもの（部分展示）が三つあるが、1971年に訪れたインスブルックの民俗博物館の展示とよく似ている。係官の好意で別館の民俗衣装を歴史的に配列した展示を見学することができた。

グラーツ郊外のスタインツの城にある「スタインツ農村博物館」も印象深い。丘の上に立つ城館や、その付近の村々は実



写真12 スタインツ農村博物館の案内板

に美しい。

スタインツ地方の農具類がよく集めてある。牛の軛、大きな木桶、藁細工、運搬用ぶどう酒樽、彩色のこみいった戸棚、タンス類。農具などは必ず「もの」を実際に使っているパネル写真とセットにして展示しているので理解しやすかった。

山下氏の車でグラーツから南下してユーゴスラビアに入り、地方都市マリボウを経てスロベニアの首都リュブリャーナに至る。この町の旧市内はオーストリア風の建物が多く、かつてのハプスブルク家の支配下にあった当時の名残りを留めている。

「民族誌博物館」は都心部にあり、考古歴史博物館と同じ建物の右側の一部を占めている。民族誌といっても東欧の場合、民俗の場合が多く、ここもリュブリャーナを中心としたスロベニアの農村や農業経営の歴史などの写真、パネル解説。ぶどう酒樽やガラス製品が陳列されている。2階は兵士、農民、大学教授など職

業別の居間の展示があるが、移築でなく、家具類を並べた簡素な展示である。展示資料も少なく、郷土民俗博物館の小規模なものといえよう。

リュブリャーナ市内をぬけると、とうもろこし畑の多い農村地帯。小屋根をつけた牧草を干す棚が多くなる。辻にキリスト像の祠が立っている。本道からそれて山麓へ。すばらしく印象的な美しい城と古い町並みがみえてくる。シュコフィア・ロカである。急坂を登り古城へ。ここが「シュコフィア・ロカ博物館」になり、背後の丘の緑地の一部が野外博物館になっている。

馬鍬や犁など農具類。ぶどう酒樽、ぶどう搾り機など、ぶどう関係の展示品。背負籠や牛馬の軛、民俗衣装などよく集めている。写真パネルの解説もある。古城に関する絵図もある。この城は16-7世紀頃のものだが、町はずっと古く、谷口集落として発達したらしい。現大統領チトーを中心とした第二次大戦関係の展示



写真13 リュブリャーナ旧市街

にも一室を割いている。

野外博物館は草葺農家（一部木造組積造り）と屋根つき乾草棚、小屋などがあるが、手入れが不十分なのは残念であった。

鋭い稜線をもつ東アルプスの山々、1300 m 余の国境の峠を越え、再びオーストリアに入る。マリア・ザールはクラゲンフルト北郊にあり、丘の上の古風な教会をとりまくように農家が集っている。この村はずれの緩やかなスロープの森の中に「マリア・ザール野外博物館」がある。ここはケルンテン州の民家など19棟を集めてあり、木片葺（こけら葺）の農家が大半を占める。屋内の大きな炉や自在鉤も印象深い。グラーツ大学のモーゼル教授の指導によっているので、特定地域の民家の発達をあとづけるのに役立つ。

## 6. バーゼル、ライデン、アントワープ

ウィーンからバーゼルまで急行列車で

10時間。ザルツブルクから西ドイツのローゼンハイム経由でインスブルック。スイス風の民家や窓辺の花々が美しい。チロルの村々は木造家屋、丸太組積造りの木小屋などの豊庫。教会の建物だけでもバラエティがあって面白い。スイスに入り、アルプスの物凄い褶曲、鋭峰、カール、氷河湖などを眺めつつチューリヒ着。ここからやや広い谷や丘陵状の地形になり、やがてラインに沿うバーゼルに到着。

バーゼル旧市内、ゴシック式の大聖堂前の広場で土曜のみの市。マルクトプラッツの朝市は野菜、果物、草花と色どり豊かで、周囲の町並みと調和している。

「バーゼル民族学博物館」は自然史博物館と同一の建物にある。エントランスホールの左手が民族学博物館で、入口にトーテムポールが立っている。研究部門も充実しており、海外調査研究も実施している。民族学関係の出版物も数多く、売店にも並べているが、ニューギニア関係の研究報告など目につく。展示品も優

秀なものが多いのだが、運悪く民族学博物館だけ大増改築中で休館であった。スイスの民族学博物館はジュネーブにもあるが、バーゼルはスイスで最も充実した民族学博物館になるとのことであった。

隣接する「民俗学博物館」は教会の広場に面している。狭いエントランスホールをぬけると展示場だが、1階は特展場で製紙関係の展示。2階は織物、民俗衣装、聖像や年中行事の民俗。アルプスなどの風景画類の展示もある。3階はヨーロッパ各地の仮面。スイス全域から集めた農具類、生活用具類などを展示している。

バーゼルからフライブルク、カールスルーエ、マンハイム、マインツを経てライン川に沿う。特にビンゲン——ポッパルド間はライン峡谷の美しさを満喫できる。列車は左岸を走る。上り下りの激しい貨物船や客船。古城、河岸の村々、急斜面のぶどう畑など土地利用の巧みさ。

ジュッセルドルフでは郊外の「ミニ・

ドーム」で民家模型をみる。ボンメルン、ブランデンブルク地方など東ドイツの民家模型もあるが、実物に接したあとだけに全く迫力がなく、模型もどこか玩具的なところがあった。

ハーゲンはジュッセルドルフの東53kmに位置する商工業都市。「ウエストファーレン伝統技術文化野外博物館」はハーゲン駅から南へ約6km。標高180～220mの谷地形を巧みに利用し、溜池を作り水車を動かす。

谷口から博物館入口まで500m余の樹々のうっ蒼と茂る遊歩道が実によい。

鍛冶屋などを集めた金属工房。水力利用の工房。手工業村はグループ別に配置し、小町並を作っている。町の工房、農村工業などを集めた伝統技術に関する野外博物館で、製粉、ロープ、パン、車大工、製紙、伸線、印刷など各種作業風景をみせる。生きた博物館をめざしているようである。小博物館ともいえる展示館が三つある。充実した定期刊行物もあり、ポ



写真14 手工業を集めた小町並み（ウエストファーレン伝統技術文化野外博物館）



ン大学のパウアー氏やアルンヘムの野外博物館も高く評価していた野外博物館である。

訪ねた最初の日が日曜日とて、館内の道路は雑沓をきわめていた。近在から来た人達が圧倒的に多いが、どこの野外博物館もよく人々が利用しており、閑散としているところは殆どなかった。

ジュッセルドルフから TEE ベートーヴェン号でアムステルダムへ。ここから支線に乗りかえる。低平なポルダーを走る。水路と牧場、列状の村落。屋根の大きなフリース型系の草葺民家も残っている。温室群と色とりどりの花。50分余でエンクハイゼンに着く。ゾイデル海（アイセル湖）に臨んだ古い商港で、16-7世紀の町家が多く残っている。港にはヨットや漁船が並び、運河に沿ってオランダ風物の一つ、はね橋もある。

「ゾイデル海博物館」は煉瓦造りの町家風の建物。ゾイデル海を航行した種々の船（実物）が大展示場を埋めたのは庄

巻。その他木彫、木靴、木箱、木製の櫛などの展示もある。当博物館付属の野外博物館は建設中で、1982年開館予定という。現場へ行くと、入口の所に、はね橋が作られ、埋立地に民家の移築が行われつつあった。

「ザーンダム・シャンツ」(野外博物館)は、アムステルダムの次駅ザーンダムの郊外にある。入江に臨み、低湿地のかなり広い部分を占めている。木造家屋を緑色に塗り、窓枠や建物のふちを白ペンキで塗りあげた玩具のようなオランダ風民家が多い。風車は大型が3基、小型が2基ある。運河が多く、はね橋の小型のものもある。木靴の製造過程をみせて即売するみやげ物店、レストランも揃っている。民家の中にオランダの民俗衣装と時計のコレクションを展示する小博物館がある。

オランダの風車や古い民家も少なくなっていくので、保存し、観光産業として活用しているのである。



写真15 「ザーンダム・シャンツ」のオランダ民家

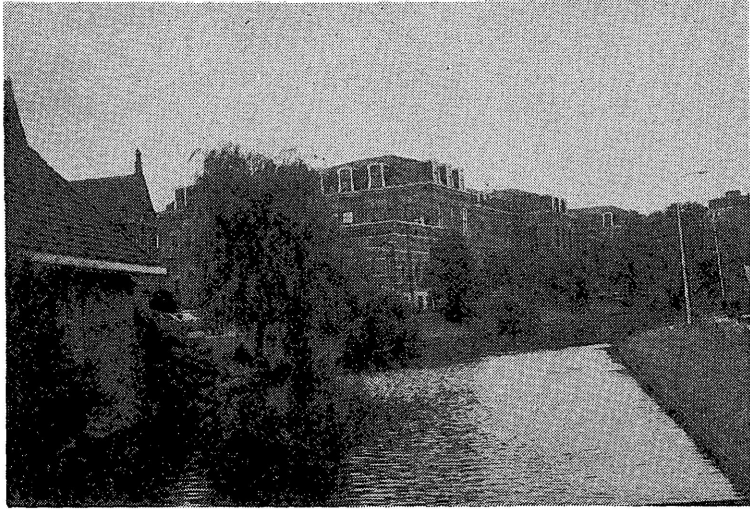


写真16 運河にのぞむ国立民族学博物館（ライデン）

ライデンには11の博物館があり、駅前にも博物館案内の看板が立っている。全く博物館の町といってよい。

「国立民族学博物館」は駅に近く、運河に沿った優れた環境にある。この博物館の源流は1813年の中国関係資料の収集展示にあり、1837年シーボルトの収集した日本の資料の公開と結びついて民族学博物館としての姿を整えはじめる。1933年旧大学病院の建物を入手し、1937年、現在の形で開館された。

1階の一部と2階の大部分が展示場で、30万点の収蔵品のうち2万点余が展示されている。入場料1.5ギルダ（150円）。エントランスホールに売店があり、ガイドブック、エハガキ、スライド、民族学関係の図書などを並べている。英文のガイドブックは62年版のままだが、大陸別民族誌や詳しい列品解説があり、充実している。まず2階へ。西側は南北アメリカ、アフリカ。ガラスケースを用いたオーソドックスな展示が多い。特別展は

「中国文化」で、別料金（75円）が必要。

中国の住宅の内部（部分）展示はかなり大型のもの。パネルで農家の間取りなども示してある。書画も多い。スライドによる中国の紹介は約15分間、現代中国の諸相をみせる。東側はインド、中国、日本、韓国、インドネシアの一部などアジア地域とオセアニア。

日本関係はシーボルトコレクションなどに優秀なものが多い。展示場に出ているのはその一部だが陶器、蒔絵、屏風、能面など美術工芸品が多く、庶民の生活用具などは少ない。特製の木づくりの壁面をもつ展示室には五体の仏像が安置されているが、淡い照明で東洋ムードを演出している。当館御自慢の展示で、ヨーロッパの人達にはとりわけ興味をそそるものであろう。オセアニアの展示も充実しているが、1階展示場の大半と2階の一部にわたるインドネシア（ジャワ、スマトラ、スラウェシ、イリアン・ジャヤ、カリマンタンなど）の展示品は本館の一

大特色。これらの地域は旧オランダ植民地であり、当時大量に集めたものである。過去のことではあるが、ヨーロッパの民族学博物館の場合、特に植民地支配時代の歴史の反映が著しいように思う。

「**ロッテルダム地理学・民族学博物館**」はマース川に臨む4階建の建物の中にある。標示も地味で、よほど注意しないと見過してしまふ。入場無料。1階はオフィスと売店。2階-4階が各3室程度の小さくまとまった展示場となっている。非西欧世界の多様な民族資料を展示する常設展示のほか、第三世界に関する特展もある。図書室の公開や映画上映も行っており、学校教育との結びつきも密接である。フィリピンの民族音楽に関する展示は特展にあたるもので、竹で造った高床式の小屋に楽器を陳列したり、写真パネルを用いた解説も多い。中国の書道に関する展示場では、墨をすって実習できるようにしている。

3階は船の展示が主で、まず台湾ヤミ族の漁船が目につく。オセアニアの船も多く、実物と模型がある。一室は南アフリカ共和国に関する展示だが、南アフリカ共和国の人種、民族分布図や新聞記事など写真と図による解説が主で、他の展示場とは異質。南アフリカ共和国ではオランダ系ボーア人が最も強く人種差別をしているといわれるだけに関心をもったが、オランダ語の解説のみで充分主張がつかめず残念であった。

庄巻はイリアン・ジャヤのアスマットの各種の神像、仮面、楯などの展示である。大神像は空間の広い階段の踊り場を利用している。

ワニや亀を形どったもの、櫛類等々。大半露出展示してあるので、その迫力に

圧倒されてしまう。イリアン・ジャヤは旧オランダ領だけに資料の蓄積があり、その上に戦後の新しい収集品を加えている。他にもアフリカや日本をはじめ各地のものを収蔵しているが、2階の一部は改築中であり、全般的には展示されているものは少なかった。

長途の旅からブリュッセルに戻り、友人宅を基地にしてベルギー各地をまわる。

アントワープ（アンベルス）中央駅は石造の堂々たる建物。インフォメーションで博物館案内の冊子をもらう。非常に詳しく便利なものである。アントワープはスケルデ川に沿う河港都市。市庁舎やギルドハウスの並ぶ広場を通り、裏側の通りに出る。急勾配の階段状切妻屋根をもつ町家風の建物が「**民俗学博物館**」である。英文の案内書もある。民族学博物館も近くにあるが、休館中なので、仏像などガラスケースに収まって本館で展示している。

民俗学博物館は1958年に公開されたが、資料の収集などは50年の歴史がある。

1階はアントワープの歴史を示す古図など。2階は農具類や牛馬の軛など。キリスト教関係のもの。民間医薬、薬屋の展示。3階はフレミッシュ民俗芸術で絵画が中心。4階は閉鎖中だったが、民俗衣装の展示や人形劇場がある。全体にガラスケースに小じんまりと収まり、一種の美術館、民芸館的な傾向が強いようであった。

ガン（гент）は、フランダースの毛織物の町として古い伝統をもっている。セントミカエル大寺院や石畳みの道、ギルドハウスの家並みが運河に影をおとす。古い町並みブームで観光客がやたらと多い。

「ガン民俗博物館」は、運河に沿ったもと少年養護院だった14世紀中頃の古風な建物を活用している。

東フランダース王立民俗学協会などによって1931年基礎がつくられ、1962年に現在の建物に移った。展示の主要部分は1900年頃のガンの町の人々の生活再現で、町の工房や店屋を復元している。

食料品店、桶屋、靴屋、木靴製造、婦人帽子仕立屋、パイプと煙草屋、印刷屋、パン屋、菓屋、菓子屋、理髪店、機織り、ハンダづけ工房、レース編み、等々。デンマークのオーフスにある「古い町」野外博物館の屋内版である。マリオネットも古い歴史があり、週2回公演している。ガンの町の風景画展もある。親切なガイドもいる。まずフレミッシュ語、ついでフランス語(ワロン方言)、英語の順で解説する。

石畳みの中庭の3方を博物館の建物が囲んでおり、古い町並みと一体となった博物館である。

「ボククリーク野外博物館」 ベルギー東部リンブルク州の地方町ハッセルトの郊外にある。こんもりした森、広々とした駐車場。

ラエネン館長は若々しい活動的な感じの人。民家を利用したレストランで、粥に甘味を加えたようなリンブルク地方のリスパップを御馳走になる。1953年に開館して今年は25周年記念に当り、屋内展示場で、この博物館の歴史を写真と図で解説している。ベルギー、フレミッシュ(フラマン)語地域の民家などを集めたもので、現在町家を復元中である。民家は一般的に広土間と焔、奥の部屋、家畜舎が一棟に集ったものが多く、北ドイツの低ザクセン型やフリース型と類似して

いる。

建物は全部もとの村落から移築したものではないが、集落形態と原景観の再現を重要視している。青少年教育にも力を入れているし、各種伝統工芸の実演も手がけている。

「ベルギー全域の建物を集めているのか」との質問には、かなり強い調子で「ここはフレミッシュのものだけ」と答えられた。南のワロン語地域との対抗意識の表われであろう。館長の車で広い館内を一巡し、主要建物について種々助言を頂きつつ調査を進めることができた。

## 7. イギリスの諸博物館

友人が物価の安いロンドンへ買物に出かけるとて、車に便乗させてもらう。早朝ブリュッセルを出て快速でとばし、フランスのカレーに至り、フェリーで静かなドーバー海峡を渡る。友人の子供達につきあってミニ鉄道ハイス——ダイムチャーチ間を試乗したり、ロンドンの「科学博物館」と「自然史博物館」を見学する。ロンドン滞在中に、「ロンドン大学アジア・アフリカ研究所」、「大英博物館」、「人類博物館」などを再訪した。

「大英博物館民族誌分館」(「人類博物館」)は都心部の地下鉄ピカデリー・サーカス駅に近いバーリントンハウスにある。1970年開設、80万点に近い巨大な民族資料を持っている。1971年の訪問時にはパレスチナの織物、ジャワのガメラン楽器、諸民族の木偶などが中心展示だったが、今回は全く変っている。

収蔵資料が豊富だから、ほぼ半年ごとに展示替えをしているという。

「ブリガリアの民俗芸術」「ソロモン諸島の民族文化」「ブラジル・インディオ」

の展示が中心であった。大英博物館本館に比べて露出展示もあり、写真や各種の図を用いた解説もよくまとまっている。

ロンドンをはじめヨーロッパの主要都市で多くの日本人をみかけるが、私の訪れた民族学博物館や野外博物館では殆ど日本人をみかけることはなかった。

「ウェールズ民俗博物館」は再訪になる。ロンドンのパディントン駅から英国国鉄御自慢のHSTに乗る。時速150kmくらいは出る。レディング、スウィンドンを経て2時間10分でウェールズの重工業都市カージフに着く。駅から西へ6.5kmの丘陵地にセントファガンス城と庭園があり、その背後の森のひろがる敷地が野外博物館である。

管理棟とモダンな2階建の展示館も完成している。1946年に開館した国立の博物館である。館長はオーストリア野外博物館へ出張中のため、物質文化部門のE. ウィリアム氏が種々便宜をはかってくれる。研究部門は、物質文化、建築、方言・伝承の3部門があり、合計15名。研究活動は活発で、特に方言・伝承部門では実地調査も盛んに行われ、各種の報告書も出版されている。

展示館はウェールズの民俗資料がよく整理されている。物質文化コーナーでは、木箱、バターづくりの桶、チーズプレス、若者が恋人に贈った手づくりのラブスプーン、織物、楽器など。民俗衣装のコーナーもよい。

農業関係のコーナーでは、犁や馬鍬や各種農具が、写真パネルなども用いて新旧変化のプロセスがよくわかるように展示している。荷馬車なども素朴だが数種類陳列されている。

野外博物館は、ウェールズ各地の民家

や教会、水車、税関の建物、漁夫小屋、闘鶏場、里程標石、ジブシーの家馬車、豚小屋と石積みのフェンスなどが集められ、前回の訪問時に比べて数棟増設されている。丁度、1棟、石積の壁で、骨組みは大きな柏の木を使った移築中の民家があった。展示館の大部分や野外博物館ではウェールズの一般庶民の生活にふれることができる。

すばらしくよく手入れされた美しい庭園をめぐるセントファガンス城に入る。この城は16世紀に建てられたエリザベス朝様式の城で、1階は台所、ホール、応接室、2階は寝室、図書室、居間からなる。陶器、絵画、食器類、家具類なども数多くあり、ここでは貴族の生活をみるることができる。1階の応接室の一部を使って、ハンガリーのブタペスト民族誌博物館所蔵の「ハンガリー農村のパンづくり」に関する特展を開催中であった。

城に隣接して、技術保存コーナーともいえる木工細工(ろくろ)と樽づくりの作業場がある。

この館の解説がすべてウェールズ語と英語で示してあるのも大きな特色である。

レディングはロンドンの西58kmにある工業都市で、パディントンから急行で30分。

「イギリス農村生活博物館」は広々としたキャンパスがひろがるレディング大学の構内にある。現在農業史研究所の付属博物館となっている。

平屋の簡素な建物で、これに研究所や図書室などがある低いプレハブの建物が接続している。ここはイギリスの農業の歴史を軸にした博物館で、農村生活の広い範囲にわたって資料を集めている。耕作、収穫用の農具をはじめ鍛冶屋、蜜

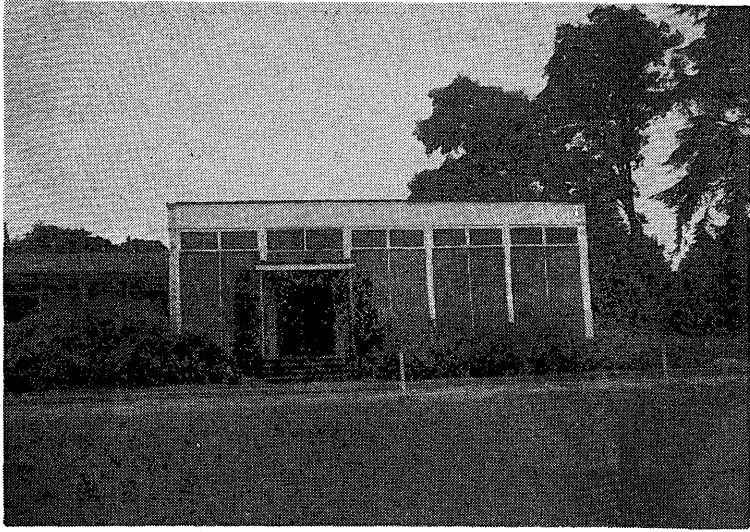


写真17 「イギリス農村生活博物館」(レディング大学構内)

蜂飼育用の道具、バターづくりの桶、家畜の軛や各種の鈴、焼印、籠類、糸車、自在鉤等々、コンパクトにまとめて幾つかのグループを作って陳列してある。

屋根葺関係の道具類も実によく集めてあり、各々道具を使用している屋根葺作業の工程を写真パネルで示している。

筥や鉆、漁網など漁業関係の資料もまとまっている。收藏庫のような感じの広いフロアには、荷馬車と犁類がずらりと並んでいる。

全般にやや「もの」が過密に展示されているが、これによって比較が可能だし、農村生活の姿を生々しく感じることができ。

図書室には農業に関する文献や諸記録も相当蓄積されているし、農業関係の写真コレクションも優秀で、例えば北デボン地方の1914年頃の蹄鉄うち風景、1900年の草葺屋根石造民家のように古い農村生活の姿を一部エハガキにもしている。

小規模で地味だが、よくまとまった研

究博物館的な性格の強い、すばらしい博物館である。

ケンブリッジでは、ケンブリッジ大学に客員研究員として滞在中の桃山学院大学の安元稔氏のお世話で、博物館や農村を見学することができた。

夏の大学都市は若者の旅行者で賑わっている。大学は多くの学部や研究所に分かれている。

「ケンブリッジ大学付属考古学・民族学博物館」も古色蒼然たる建物の一面にある。中庭に入ると目立たないが、博物館の標示板がでている。研究室に隣接して展示場があり、陳列ケースがぎっしり並んでいる。收藏庫のような感じである。開館時間は午後2時～4時と短く、いかにも大学付属博物館らしい。

收藏総数は数10万点で、考古学資料が多いが、民族学関係も45%を占めている。中南米、アフリカ、アジア、オセアニア等々全世界にわたっているが、A. C. ハドン学術調査隊や、J. クックの収集

品などオセアニア関係の民族資料が最も充実している。

天井まで吹きぬけの所にハイダ族のトーテムポールが立っている。

オセアニアは、殆どハッドン・コレクションで、ニューギニアの仮面や神像も数多いが、19世紀末に実施したトレス海峡諸島の調査による収集品はすばらしい。展示されているものだけでも4つの陳列棚につめこまれ、ケースの上にも小型ケースを積み上げている。

1975年以降、関西大学の藪内芳彦教授や関西学院大学の大島襄二教授らとトレス海峡諸島の共同調査を続けているが、現在殆ど見ることのできない仮面、木偶、槍、呪術の石、唸り木、羽根つき頭飾りなど貴重な資料が並んでいる。特にマリー島、マビオグ島のものが多い。これらはハッドン隊の学術調査報告に記載されているものが大半を占める。

ニューカレドニア、トンガ、サモアのものも多く、カヌーが数隻天井から吊ってある。

大学研究室の長年の資料の蓄積の巨大さに感服する。この博物館は研究室収蔵庫を一般に公開しているといった感じが強い。

「ケンブリッジ民俗博物館」は、ケンブリッジの町はずれに近い街道沿いの町家を利用している。農村生活や中世から20世紀初頭に至る庶民の歴史を展示している。

1936年に開館し、数回展示場の増築をしている。展示品はケンブリッジの周辺や低湿地フェンランドから収集したもの

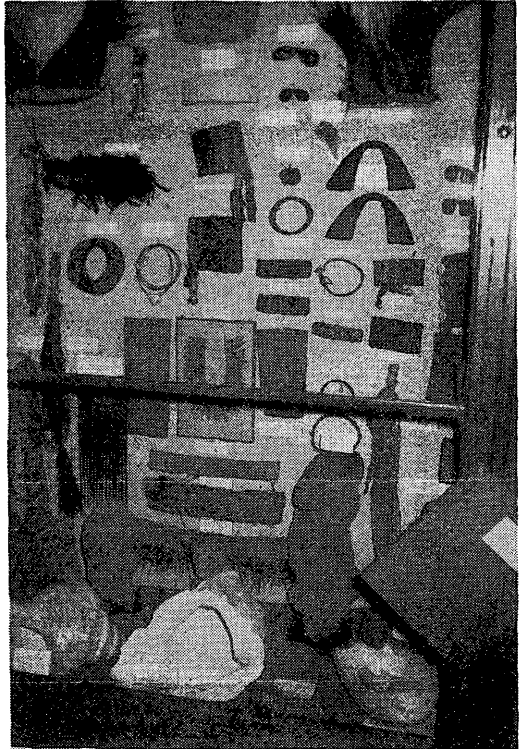


写真18 ハッドン・コレクション [トレス海峡諸島]  
(ケンブリッジ大学附属考古学・民族学博物館)

である。

エントランスは町の店屋風で事務所兼売店。各部屋を展示室にしているので扉を一つずつ開けて入る。屋根葺、煉瓦工、靴屋、馬具、籠作りなど職業別の展示。

古い手づくりの煉瓦や17世紀の屋根瓦など地方の建築材料。煖炉と自在鉤、料理用の道具、食器類。糸車、亜麻織物、長いテーブルに各種の秤。玩具のコレクションもある。農村生活では、バターづくりの木桶や大鎌、羊の鈴、犂、狐やもぐらの罠類等。低湿地フェンランドの泥炭掘りやすゲ刈りの道具。鰻や魚をとるヤス、筌など地方色豊かな民俗資料があふれている。

この博物館はハーフチンバーの木組の美しい町家で、展示室にも木組がみえて独特の雰囲気があった。3階の展示室は天井裏部屋にあたる場所であった。

車でケンブリッジから東へ向う。緩やかな起伏、松林が多いが、一種の耕地防風林の役を果たしている。小麦、大麦、甜菜、豆類の畑。麦の収穫にコンバインが活動している。

ニューマーケットの町から少し南東へ出はざれたストラディシャル村辺り、草葺半寄棟や切妻の民家が残っている。窓ぎわの屋根の切りかたが造形的に面白い。壁の色も家々で特色がある。近くで草葺屋根の葺替え作業をしている。梯子を10カ所にかけて、赤地に白で「P. Dabies THATCHER Boxford 210498」と書いた看板を出して一人で作業している。葺替えには約2週間かかるという。丁度棟近い部分の仕上げをしていた。材料はノーフォーク産の葦で、最大80年位は耐久力があるらしい。低湿地に近く、葦が多いことも草葺(葦)民家が比較的残っている要因であろう。

ラベナムはサフォーク州の地方町。街道に沿ってハーフチンバーで縦の木組がすばらしく印象的な町家が並んでいる。サフォーク州保存協会発行の「ラベナムめぐり」には詳しい町の地図と古い建物がリストアップされている。

マーケット広場に面して16世紀に建ったギルドホールがあり、地方史の博物館

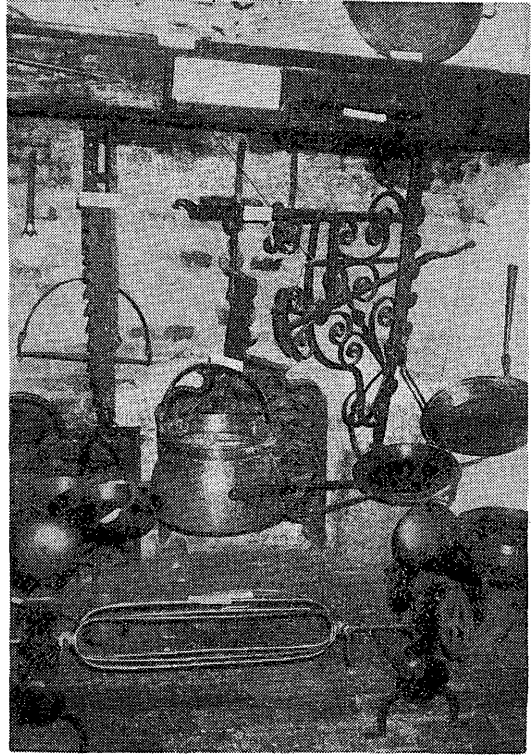


写真19 ケンブリッジ民俗博物館の展示

になっている。古びた織り元の家もハーフチンバー。ホテルも町家をそのまま利用したものがある。

よく保存された美しい町並みは、そのまま生きた野外博物館になっているようである。

その他イギリスでは、イングランド南部サセックス州の「シングルトン野外博物館」や、バーミンガム南郊の「エイボックロフト野外博物館」を調査することができた。

マン島にあるケルト村落を復元したイギリスで最も古い野外博物館をはじめ訪ねたい博物館は数多く残っている。ヨーロッパ全域からみると、特に東ヨーロッパについては殆ど未調査である。これら



は今後の機会に譲り、ロンドンから帰国の途についたのであった。

<謝辞> 今回の渡欧では随分多くの人々にお世話になった。特に調査に御協力頂いた各野外博物館の館長はじめ職員の皆さん、ボン大学日本文化研究所の J. クライナー博士、E. パウアー博士、ロンドン大学アジア・アフリカ研究所の P. G. オニール博士、大阪外国語大学の君塚進先生、ブリュッセルの鎌田光三氏、ウィーンの山下一道夫妻、桃山学院大学の安元稔氏、大阪市立大学の中村泰三氏、筑波大学の高橋伸夫氏に対し厚く御礼申し上げます。

## 文 献

- 糸魚川淳二  
1979 『博物館だより、ヨーロッパに原点をもとめて』共立出版。
- 石原憲治  
1976 「ヨーロッパのミュージアムの国際組織について『民俗建築』72:1-2。
- 河岡武春・坪井洋文・杉本尚次  
1974 「座談会、ヨーロッパの民俗・民族学博物館」『民具マンスリー』6(10・11):1-31。
- 宮本繁雄  
1977 「ロンドンの人類博物館」『月刊みんぱく』1(2):14。  
1978a 「パリの国立民芸・民間伝承博物館」『月刊みんぱく』2(3):14。
- 1978b 「ケルンの民族学博物館など」『月刊みんぱく』2(8):14。
- 中川成夫  
1970 「アジア・ヨーロッパをめぐる」『MOUSEION』15:18-34。
- 佐々木高明  
1973 「ヨーロッパの主要民族学博物館——その実地調査報告——」『学術月報』27(10):16-33。
- 杉本尚次  
1972 「ヨーロッパの野外博物館訪問記——1971——」『季刊人類学』3(1):186-208。  
1977a 「ヨーロッパの民俗学・民族学博物館訪問記——1971——」『地域と民家』明玄書房, pp. 236-251。  
1977b 「市民のふるさとスカンセン」『季刊民族学』1(1):96-100。
- 杉本尚次・岡崎 晋編  
1978 『スウェーデン・デンマーク野外歴史博物館』講談社。
- 鈴木 恂・二川幸夫  
1978 『木の民家——ヨーロッパ』(A.D.A. EDITA Tokyo Co., Ltd.)。
- 竹内利美  
1973a 「北欧民俗博物館管見(1)」『民具マンスリー』5(10):1-4。  
1973b 「北欧民俗博物館管見(2)」『民具マンスリー』5(11):1-6。
- 和田正洲  
1976 「民俗学博物館論」『日本民俗学』106:52-62。
- ZIPPELIUS, A.  
1974 *Handbuch der europäischen Freilichtmuseen.* Rudolf Habelt, Bonn.